

矢板のお城めぐり：番外編

市内の主な古戦場跡

これまで6回にわたってお送りしてきた「矢板のお城めぐり」ですが、今回は番外編をお送ります。お城があれば、そこには必ず戦いの跡が遺されています。戦国時代には、塩谷家は宿敵であった那須家との戦いに明け暮れていました。今回は、その中から、代表的な戦場跡をご紹介します。（那須記・矢板市史より）

塚原川に架かる合戦場橋（扇町）



天正10(1582)年6月10日 矢板村の合戦では、この橋一帯で那須勢との激しい戦いが繰り広げられた。この戦いで大沢主水は戦功をあげ、太田郷を拜領することとなった。

上らんとうの碑（館ノ川）



応永30(1423)年、宇都宮家第13代持綱が塩谷教綱に狼に誘われ、この地で謀殺。身内同士の後継者争いで、その後教綱は宇都宮城に誘われ殺害。塩谷家は断絶となった。

回向塚碑（沢）



応永24(1417)年8月20日 那須本家資之と弟の沢村資重が、現在の那須学園一帯で激突。両軍の戦死者は136名にも達し、その霊を慰めるためにこの塚が築かれた。

戦死者の墓碑群（長井）



天正17(1589)年10月1日 那須勢に攻められ、長井の堀之内城が落城した。この時、塩谷家の家臣でもあり、堀之内城の城代でもあった渡辺信濃守が討死している。

荒川の含満力測（乙畑）



荒川は乙畑城を守る外堀の役目を果たしていた。天正13(1585)年7月、この川を挟んで喜連川勢と激しい攻防戦が繰り広げられ、乙畑城は落城したと伝えられている。

境の明神（土屋）



塩谷家と那須家との20数回にもわたる合戦の末、この地に社を立てて両家の境界とした。しかし、その後間もなく両家は、太閤秀吉によって改易されてしまった。

記者の独り言

うい栽培の記録

私は高校卒業後すぐに家業の農業を継ぎました。農業の面白いところは、自分なりに工夫をし、収入を得られることです。平成三年、首都圏農業栽培導入に踏み切りました。初年度は一〇六アール栽培し、一八〇〇ケール出荷しました。その後、徐々に規模拡大を図り、平成六年には二八〇アール、五一三ケールの出荷実績を上げました。しかし、その後、時代の流れとともに、組合での共同作業を続けることが困難となり、個人で栽培

培on(うい)をまじった。生産組合で共同栽培していた時と比べると、個人では困難も多く、忙しい日々を過ごしました。そして、いろいろと試行錯誤を繰り返しながら、順調に出荷量を伸ばすまでにになりました。また、うどの規模拡大による経営改善ができ、土地利用型農業経営の確立が図られたとも思っています。これが思い出深い記憶として心に刻まれ、励みとなっていていきます。これからも農業確立に向け、努力をしていかなければならないと思っています。(S・M)

やすらぎの郷矢板 自然がいっぱいの矢板で生まれ育った三人の子供たちが、東京で暮らし始めて数年が経ちました。東京の生活はおしゃれで利便性が高く快適だと言っています。が、夜はとても明るく星ひとつ見ることができないところで、むなししい気持ちになるそうです。我が家の子どもたちの部屋には、天窓があるの毎晩のように星を眺めては、きつといるな思いを巡らせたり、私たちが何気ない生活の中には、意外なところがあるもので、そこには自然環境の力が大きく影響している、生きていくには、とても大切なものなのではないかと、思います。そのうちひとりぐらいい帰って来ないかな。(T・O)

(編集後記) 豪雨の災害で大変な被害に遭われた方々には心からお見舞い申し上げます。毎日、本当に暑い日が続くので、身も心もショートしそうです。そんな泣き言を言っていたら、被災された人たちに叱られそうです。矢板は比較的災害の少ない住みやすいところです。皆さん、この暑い夏を何とか元気に乗り越えていきましょう。(R・K)